

〈巻 頭 言〉

## 家族の健康を考える

衛 藤 隆

今年、すなわち1994年が国連が定めた「国際家族年」であることは、すでに新聞等を通じ目にする機会も増え、ご存知の方も多いことと思われる。家族という概念は公衆衛生にとっても非常に関りが深く、老人保健、母子保健を始め、様々な分野において「家族」の問題が重要なテーマとなっている。ヒトの群れとしての最小単位である家族は、人類の歴史の流れとともにその役割が大きく変化した部分もあるし、また連綿と変らず続いている部分もある。農林水産業等の第一次産業に基盤を置いた労働により収入を得、出生率が高く、また死亡率も高いという時代背景の下では、大家族による共同生活がごく自然な姿であったであろう。産業構造の変化や技術革新の進展に伴い、一家の主たる働き手が生産労働やサービス産業に従事するという家庭が次第に増加してきた。賃金収入を得て生活するようになると、必ずしも大家族で生活するメリットは薄れてきた。家族は夫婦とその子どもからなる、いわゆる核家族という形態をとることが多くなってきたことは衆知の通りである。人口構成が多産多死型から少産少死型へと変化したことや乳児死亡率の低下、疾病構造の変化等も互いに関連をもって家族の様子の変化に影響をもったと考えられる。家族形態の変化は、高齢者のひとり暮らし、慢性疾患に罹患した高齢者の介護の問題、育児体験の伝承の途絶、若い親の育児に対する自信の喪失、さらには育児不安の形成等々、様々な公衆衛生に関連する問題を生じてきている。家族の機能が改めて問いなおされ、地域や行政の支援という側面も真剣に考えられている現状である。

このように、家族の形態や機能に変化を生じた現代のわが国の地域社会において、健康をファミリー・ヘルス（家族保健、家庭保健などということもできるかもしれない）という枠組みでとらえ、考えてゆく立場がありうる。人が生まれ、育ち、自立した生活基盤を築き、老いて、そして一生を終えるという一連の過程（ライフサイクル）を念頭においた保健、言い換えるなら長期的視野をもった保健が時代の変化に応じて必要とされていると言えないだろうか。

21世紀を目前にひかえた今年、1994年が国際家族年とされたことは、わが国の公衆衛生にとっても極めて意義深いことである。地球上の様々な地域で、家族の各構成員の人権、教育、栄養、健康等について注意がはられ、検討が加えられることにより、次の世紀の人類の生存に貢献することを期待したい。